

Title	ダグラス・デーキン著 チュルゴオ及び仏蘭西アンシアン・レジーム
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.2 (1940. 2) ,p.269(125)- 283(139)
JaLC DOI	10.14991/001.19400201-0125
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400201-0125">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400201-0125</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

全屬領の本國よりの遠距離、並びにその地域的散在性に基く弱點を、能く克服し得る限りに於てはじめて望み得る事である。海上に於て獨逸に敗れんか。輸入の杜絶によつて英本國國民は、僅か數週間の裡に、飢餓に瀕するとも測り知れないであらう。

〔附記〕 昨年末、本稿執筆前、時局問題研究補助金の授與を受けた。本稿を草するに當り、其の一部を利用した。誌上を通じて寄附者三井高陽氏に厚く御禮を申上る次第である。

ダグラス・デーキン著

『チュルゴオ及び佛蘭西アンシアン・レジーム』

高橋誠一郎

倫敦大學パークベック・コレッジ史學講師ダグラス・デーキン (Douglas Dakin) 氏は昨一千九百三十九年『チュルゴオ及び佛蘭西のアンシアン・レジーム』(Turgot and the Ancien Régime in France.) を公にし、英文を以つて草せられた最初の權威あるチュルゴオ傳を世に問はんことを期した。固より此の經濟學者にして政治家たる偉大な人物に關する文献は是れ迄に甚だ多く存してゐる。今、其の一端を擧ぐれば、

Du Pont de Nemours, Notes et Mémoires sur la vie, l'administration et les ouvrages de M. Turgot, 1782.

\* Dupuy, Éloge de Turgot. Mémoires de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres. xlv, 1783.

M. D. T. R., Essai sur le bien public et observations sur les mémoires concernant la vie et les ouvrages de M. Turgot, 1783.

(Condorcet), Vie de Turgot, 1786.

ダグラス・デーキン著『チュルゴオ及び佛蘭西アンシアン・レジーム』

- Soulavie, Mémoires historiques et politiques du règne de Louis XVI, 1801.
- Dupont de Nemours, Observations sur les points dans lesquels Adam Smith est d'accord avec la théorie de Turgot, et sur ceux dans lesquels il n'en est écarté. Œuvres de M. Turgot, précédées et accompagnées de mémoires et de notes sur sa vie, son administration et ses ouvrages, i, 1808.
- Montyon, A. de, Turgot. Particularités et observations sur les ministres des finances de France, 1660-1791, 1812.
- Boudet, H., Discours sur Turgot. Bulletin de la Société Royale d'Agriculture, des Sciences et des Art, Jan. 1822.
- Weiss, Turgot. Biographie universelle, ancienne et Moderne, xlvii, 1827.
- Eiselen, Oekonomisten. Ersch und Gruber, Encyclopädie, III Sektion, 2 Bd, 1832.
- Monjean, Notice sur la vie et les ouvrages de Turgot, 1844.
- Baudillart, M., Turgot. Revue des Deux Mondes. 15 Sept. 1846.
- Bouchet, A., Éloge de Turgot. Académie française, 1846.
- Kellner, Zur Geschichte des Physiokratismus. Quesnay, Gournay, Turgot, 1847.
- Hugues, G. d., l'Essai sur l'administration de Turgot dans la généralité de Limoges, 1859.
- Bathie, A., Turgot, philosophe, économiste et administrateur, 1861.
- Gomel, C., Les Causes financières de la Révolution. Les Ministères de Turgot et de Necker, 1862.
- Master, A., Turgot sa vie et sa doctrine, 1862.
- Master, A., De la philosophie de Turgot, 1862.
- Laspeyres, Quesnay, Turgot und die Physiokraten. Bluntschli, J. C. und Brater, K., Deutsches Staats-Wörterbuch. Bd. VIII, 1864.
- Larcy, M. de, Louis XVI et Turgot. Correspondant 26 août 1866.
- Von Scheel, Turgot als Nationalökonom. Zeitschrift für die Gesamte Staatswissenschaft, Bd. XXIV, 1868.
- Partouneau du Puyode, Études sur les principaux économistes: Turgot; A. Smith; Ricardo; Malthus; J. B. Say; Rossi, 1870.
- Hodgson, W. B., Turgot: his Life, Times and Opinions, 1870.
- Lavergne, L. de, Turgot. Les Économistes français du XVIII<sup>e</sup> siècle. Économistes et publicistes contemporains, 1870.
- Renaud, G., Les Prophètes de la Monarchie, 1870.
- Renaud, G., Les martyrs de l'économie politique, Vauban et Turgot, 1870.
- Cadet, F., Turgot, 1727-1781, 1873.
- Chevalier, Turgot et la liberté du travail, 1873.
- Von Sivers, Turgot Stellung in der Geschichte der Nationalökonomie. Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, Bd. XXII, 1874.



然しながら、著者デーキン氏の言ふが如く、チュルゴオの生涯及び施政に關する何等の包括的研究も過去四十年間を通じて英語を以つて發表せらるゝことがなかつた。而して第十九世紀に於いて公にせられた彼れに關する英語文献中には事實上今日に於いて大なる價值ありと看做さるゝものは皆無である。英語を以つて草せられたチュルゴオに關する著作中に在つて嶄然として頭角を抽んずるものは、前掲スチーヴンズ(W. Walker Stephens)の一千八百九十五年の著である。而も、此の書は、デーキン氏を以つて觀れば、財政總監としてのチュルゴオの生涯及び施政に關する限りに於いては、主として一千八百七十七年に現れたフォンサン(P. Foncin)の著に基けるものであつて、這般の典據よりして、そは多數の不正確を再現せしめてゐるのみならず、本書をして更に時代後れのものたらしむる所以のものは、其の記述せられた立脚地、即ち第十九世紀の自由主義者が其の信條の創唱者の一人に對する尊敬の其れである。(デーキン氏がフォンサンの *Essai sur le ministère de Turgot*. 出版の年を一千八百八十七年と記せるは恐らく一千八百七十七年の誤記であらう)。スチーヴンズの著は又、チュルゴオ時代の政治、行政及び經濟史を單純化するの傾向あるものである。(Dakin, p. v.)。

第二十世紀を通じてチュルゴオの生涯及び事業に關する知識は著しく増大し、而して、佛國大革命以前の政體に關する文献の現るゝこと頗る多く、爲めに新たなる傳記の背景は必然舊研究の其れとは別箇の形狀を取らなければならなかつた。現世紀は又、チュルゴオの著作集の新版を吾人に與へた。是れ迄行はれて居つたデュ・ボン・ヅ・ヌムーン(Du Pont de Nemours)編一千八百〇八一一年版 *Oeuvres de M. Turgot, précédées et accompagnées de mémoires et de notes sur sa vie, son administration et ses ouvrages*. 九卷並びにマイル及びマッサール(Eugène Daire et Hipp. Dussard)の一千八百四十四年新版 *Oeuvres de Turgot, nouvelle édition, avec les notes de M.*

*Du Pont de Nemours, augmentée de lettres inédites et précédée d'une notice sur la vie et les ouvrages de Turgot*. (Collection des Principaux économistes, Tome 3-4.) 二卷の外にシヤル(Gustave Schelle)編一千九百三十二年版 *Oeuvres de Turgot et Documents le Concernant avec Biographie et Notes*. 五卷を加へたことが是れである。此の全集は少數の斷簡を除いては、殆んど全く遺漏なきものであつた。是に於いて乎、本書の著者の事業は、本源的に資料を蒐集するよりも、寧ろ甚しく論争ある老なる文献を研究し、而してチュルゴオの經歷と其の生存せる時代に關して自己の解釋を與へんとするに在つたのである。(Ibid., p. vi.)。

著者はアンシアン・レジームの全史に對して多大なる注意を拂つた。蓋し、斯くの如きは、諸傳記に於いて常見るよりも更に詳密に其の人物の時代の經濟及び行政史の一定方面並びに其の思想及び政治觀の一定形相をも亦叙述することなくして、チュルゴオの行はんことを企圖し、成就し、而して失敗せる所のもの、並びに彼れの失敗の理由如何を正確に物語ることは不可能であると云ふ信念に基けるものである。彼れは又、チュルゴオが實際に企圖したる所のものを明白に限定するが爲めに、彼れの企圖せざりし所のものを嚴正に説明せんことを期した。著者は斯くの如き目的を達成するが爲めに、チュルゴオの生涯及び事業の一般的環境に對して多くの紙面を割くことを必要ならしめられた。(Ibid., p. vi.)。

## 二

著者はデュ・ホーセ夫人(Mme Du Hausset)の *Mémoires* 中に傳へられたヴェルサイユ宮殿の中二階に居住せる重農學派の中心人物フランソワ・ケネーの正餐會に於ける若き參事院議員補チュルゴオの國王論に筆を起し、幾世代間、チュルゴオ家が王政との連結特に緊密なる家族の一團に屬したることを述べ、一千七百二十七年五月十日に於

ける彼れの生誕より同六十一年八月八日の縣令任命に至る迄を第一章に於いて述べる。此の時期の記述中、先づ經濟思想史の研究者の注意を惹くは、一千七百四十九年四月七日附巴里發シセ師 (Abbe de Cice) 宛の長文の書翰に關するものであらう。此の書翰は一千七百二十年五月二十一日の有名なる布告發布の數日前、かのジョン・ローの紙幣發行の政策を擁護せる佛蘭西學士會員テラソン師 (Jean Terrason) の公にせる小冊子を排撃するが爲めに草せられたものである。(Ibid., p. 10.)

重農學派の人々が其の學祖ケネーの經濟理論を聽くが爲めに彼れの居室に正規的に集合し始めたのも此の時期、即ち一千七百五十七年以後のことであつた。チュルゴオは此處に批評的な態度を以つてケネーの意見に熱心に耳を傾けた。彼れは又、此處に若きバックルー公爵の師傅として初めて巴里を訪れたアダム・スミスと會談し、此の蘇蘭哲學者と意見を交換して其の知識的能力によつて深き感銘を受けたと云はれてゐる。チュルゴオは又、ソルボン又大學を出で、後幾許もなく、後年デュ・ボンによつて、ケネーと併んで重農學派の二始祖の一人と稱せらるゝに至つた。ジュールネー (Jean Claude Marie Vincent de Gournay) と相識るに至つた。ジュールネーは當時工業検査官であつた。ジュールネーは深き愛情をチュルゴオに寄せ、兩者は多くの時間を經濟問題の論議に費した。一千七百五十二年より六年に互つて、彼れが公務上ブルゴオと共其他の諸縣の商工業視察に従事せる時、彼れは非公式の資格に於いて彼れに同伴す可き旨をチュルゴオに求めた。斯くして、約三箇年間に、チュルゴオはジュールネーを助けて商工業の状態を調査し、工業者及び商人の不平を聽いた。此の間に獲得せる經驗はあらゆる方面に於いて極めて貴重なるものであつて、後に、彼れがケネーの二黨を屢々訪るゝに至つた時、彼れはケネーの不條理の多くを回避し、堅牢なる事實の巖の上に經濟理論を建設するの手段を取得して居つた。洵にケネーの一派は工業の問題を等閑に付

すること餘りに屢々なるの嫌ひあるものであつた。歸還後幾許ならずして、ジュールネーは病に臥し、長く病苦と闘へる後、一千七百五十九年を以つて歿した。マルモントル (de Marmontel) はジュールネーの傳記を草せんことを欲し、チュルゴオに求むるに其の師の業績及び教旨に關する覺書を草せんことを以つてした。數日の後、チュルゴオは需めに應じて、彼れが其の八箇年に互れる交際の間にジュールネーより聽ける自由貿易論を簡短明瞭に説明せる經濟論篇を草した。是れ即ち一千八百〇八年にデュ・ボンが *Eloge de Gournay* の題下に出版せる所のものである。

著者デーキン氏は、此の著を以つて、彼れが一千七百六十六年、躁しく起稿せる短論篇 *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses* と共に、チュルゴオの經濟理論の一般的概略を供するものと做し、而して、後者は彼れが一千七百五十九年に於いて把持せる想念の上に何等の進歩、何等の變化をも劃するものに非ずと觀てゐる。「彼れは恰も七年後に於けると等しく此の年に於いても同じく迅速に『省察』を草することが出来たであらう。加之、是れ等論篇の孰れに於いても、彼れは其の意見の全範圍を表明しつゝあるものではなかつた。『追悼の辭』に於いては、彼れは單にジュールネーの教旨の精彩ある要略を與へつゝあるに過ぎず、『省察』に於いては二百項の範圍内に於いて、彼れは管だに單純なる教科書を草しつゝあつたに過ぎなかつた。此の些細なる努力が全歐洲の評判と爲つた時、彼れは事の意外に甚しく驚かされた」。(Ibid., p. 18.) 著者は又、チュルゴオが此の時期に於いてタッカー (Josiah Tucker) の *Reflections on the Expediency of a Law for the Naturalization of Foreign Protestants*, 1751-2 を翻譯して之れに註釋を施し、*Questions importantes sur le commerce*, 1755. と題して公にせる旨を記すことを忘れてゐる。(Ibid., p. 19.)

## III

次いで、著者は、チユルゴオのリモージュに於ける施政に於いて、縣令統治組織の例證を看出し、一地方に於いて現實に作用しつゝある佛國官僚政治、他の制度によつて絶えず破毀せらるゝ其の努力及び財政機關の運轉を注視し、而して又、明かに多くのものに比して進歩遅く且つ窮乏せるものではあるが、而も猶ほ佛蘭西の大部分の可なり典型的なる一特殊地方に於ける經濟狀態を研究して政治上の問題に關する一定の觀念を摘取せんとする。更らに、藏相としてのチユルゴオに就いて物語るに及んで、著者は中央官僚政治の作用を検討し、而して其の時代の政治觀との關係に於ける這般の政治、即ち、宮廷に於ける黨派的鬭争、國王と議會との間の軋轢、宗教的確執、並びに王國の施政に變化を生ぜしめんとする其の時代の自由主義者の努力を觀んとする。

チユルゴオは第十八世紀に於ける佛蘭西の諸制度が完全なる自然法無視を表明せるの事實を發見して非常なる驚きに打たれた。殊に彼れは當時行はれつゝある經濟制度を慨歎した。彼れは其の同時代の人々よりも遙かに力強く、商業規制と過度の租稅負擔が相合して過く王國を通じて資本の至要なる流動を制限するの事實を體得した。斯くの如きは彼れの最著名なる著作『省察』の主要テーマである。(Ibid., p. 287)。是に於いて乎、著者は此の書を中心としてチユルゴオの經濟思想を仔細に解説する。彼れを以つて觀れば、チユルゴオの經濟思想は豫言たるよりも寧ろ彼の時代の經濟狀態の透徹せる分析であつた、斯くて又、彼れの提案は本質的に、彼れの診斷せる經濟的痼疾に對する醫療法であつた。『省察』は彼れの改革案の基礎たる二原理を宣明する。第一に、土地は富の單一の源泉であり、第二に、繁榮なる經濟は資本の無拘束なる流動に依存すると做すものが即ち是れである。本質上彼れが重農學派と共有する是れ等の教義より立論して、彼れは佛國の財政制度に對する激烈なる攻撃を開始する。彼れは細目に於いてはケネーの教規に悖る所あるも、而も彼れは其の公文書に於いてあらゆる機會に乗じて重農主義的教義を普及せしめ、土地財産の所有者に課せられたる單一税を主張した。(Ibid., p. 295-296)。

デーキン氏は、後世の學說に照して重農主義的理論を検討するの舉が實際に於いて無用の業たるに拘らず、而も猶ほ、是れ迄に屢々行はれたが爲めに、種々なる誤解を生じたるの事實を注意してゐる。例へば、重農學派が富を物質的物件と混同し、價値を生産費と混同すると做すヒッグズ(H. Higgs)の評言の如きは嚴密に言つて眞ではなからず。例外なく、重農主義者は、富が物質財の境界を超越すること、あらゆる自然的産物が勞働と混合せらるゝの時、其の價値を増加すること、並びに、一貨物——例へば、藝術品——は其の中に含蓄せらるゝ物質の其れと全然均衡することのない價値を有するを得可きことを承認した。彼れ等は又、ヒッグズの想像するが如く、生産費は原料の價格により、又、其の上に加工する職人の生存費によつてのみ決定せらるゝことを主張するものでもなかつた。一様に彼れ等は生産の経費が他の要素の上にも——資本利用の失費及び貨幣の利子の上にも——亦、依存すること、並びに貨銀は生存費によつてのみならず、供給及び需要によつて決定せらるゝことを承認した。事實上、重農主義者等は「價値」なる名辭を二個の相異なる意味に使用した。狹義に於いては、彼れ等は是れに由つて一貨物が市場に於いて賣らる可き價格を意味し、而して彼れ等は大體に於いて限界價値の理論を豫示したが、而も彼れ等は遂に之れを大成することなくして終つた。狹義に於いては、此の名辭は單一なる語中によく包含せしめらるゝことを得ざる他の意味を有する。彼れ等が價値あるものとして貨物及び勤務を云々せる際には、彼れ等は其の市場價格又は其の時價を意味せずして、國富増加に於ける其の役割を意味する。例へば、一の藝術品は高き交換價値を有することを得可きではあるが、而も、それが國外に於いて賣却せられ、斯くして取得せられたる貨幣が原料品、道具若しくは其れ以上の富の生産を目的とする資本に投入せらるゝに非ざれば、そは何等の「生産的」價値をも有することなかる

可きである。又、重農主義者が工業を以つて「不生産的」であると言ふの時、彼れは職人及び工匠が國富の生産に全然参加することなきを意味するものではない。否、寧ろ彼れは彼れ等が三重の過程に於いて之れに貢献することを認めるものである。即ち、第一に、彼れ等が繁榮なる農業を維持するに必要な需要を創造する農産物の消費者として、第二に、彼れ等は其の製作する原料に對して資本としての價值を與ふるが故に、彼れ等は創造的なる生産者として、而して最後に、經濟生活上肝要なる任務を遂行するに由つて、彼れ等は農業家をして其の全時間を擧げて彼れの農場に對する注意に捧ぐるを得せしむるに依つてある。工匠及び職人の勞働は、彼れ等が富を蓄積する最初の過程に於いて、即ち大地より原料品を抽出するに於いて、毫も参加することがなかつたと云ふ意味に於いてのみ不生産的であつた。(Ibid., pp. 301-302.)

吾人は本書の著者が這般の論述を行ふに當り、其の典據を重農主義者の本源的文献によつて明示することなかりしを遺憾とする。吾人はケネーの價值に關する見解が、交換的見地よりするものと、生産的見地よりするものとの二義あることを認むるものではあるが、『三田學會雜誌』第三十三卷第十號所載拙稿「效用價值學說史の一節」八一頁、而も遂に彼れに於いて限界價值理論の豫示を認め得ざるものである。

著者の強調せるが如く、重農學派が工業を「不生産的」と呼ぶの時、彼れ等は工業に従事する者が全然國富の増加に参加することなきを意味するものに非ざることは、ケネーが『大百科全書』に寄せたる一千七百五十七年の *Les Riches* 中に掲げられたる經濟行政の十四法則中の第一に於いて「農業と異り、工業上に費されたる勞働は富を増加することなし」と説くと共に、直ちに其の第二に於いて「而も、そは人口及び富の増加に資することある可し」と言ひ、又其の第五に於いて「工業上の勞働は土地より生ずる収入を増加するの結果を來し、而して是れに由つて再び

工業を支持する」と論じたるに徴しても疑問の餘地なき所であるが、而も、工業は不胎なりと稱するの辯餘りに甚しきに過ぎ又グールネーの商工業に對する制限の痛罵を忘却すること餘りに屢々なるの故を以つて、チュルゴオ其の人が重農主義者を非難せることは本書の著者の説く所に依つても明かである。自ら兩者の學徒を以つて任じ、彼れはグールネーが經濟的自利の原理より立論して、他の角度より經濟學の問題に迫れるケネーと同様の結論に到着せることを主張した。(一千七百六十六年二月二十日附デュ・ボン宛書翰參照。Oeuvres, par Schelle, op. cit., II, p. 506-508; Dakin, p. 302.)

世にはチュルゴオを以つて「ケネーの最大の高弟」と稱する者あるも、而も、彼れを目して純然たる重農學徒と觀るの非なるは今茲に縷説するの要を見まい。バットイ(Anselme Polycarpe Batbie)及びレオン・セイ(Léon Say)が、チュルゴオを以つて其の原理をケネーより傳承せるものと主張せるに對し、ギユスタヴ・シェル(Gustave Schelle)が彼れを以つてグールネーの學徒なりと斷言せるの事實を擧げ、而して、チュルゴオが是れ等兩者中の孰れにも濫りに従ふことなかりしと做すラフォン(J. Lafont)の結論を以つて明かに最も満足なるものと本書の著者は看做してゐる。(Dakin, p. 346.)

尙ほ、吾人は唯物論的機械的なるケネーの價值論に對して心理學的主觀的なるチュルゴオの其れを認むるの時、後者の上に及ぼせるガリアニ及びグラスランの影響を看逃すことを得ない。著者デーキン氏が偏へに一千七百六十六年の『省察』及び其の翌六十七年三月二十五日附ヒューム宛書翰によつてチュルゴオの價值及び價格論を窺はんとし、凡そ一千七百六十九年の頃に起稿せられたものと看做さるゝ其の未定稿「價值及び貨幣」を精査せられざりしことを遺憾とする。



然しながら、チュルゴオは無條件的に外國貿易の自由を主張するものではあるが、而も、彼れは先づ第一に其の國內に於ける商工業に對する制限の廢止に關心を有し、而して彼れは彼れが主として奢侈品及び佛蘭西に於いて生産せらるゝことのない少數の原料品に限定せられたる外國貿易を眼中に置くことを常に明かならしむるの事實を注意せるの點に於いて、著者の所論は吾人をして首肯せしむるものがある。蓋し、著者の語を以つてすれば、食料及び重要貨物に關する場合には、輸送費は常に是れ等のもの、價値に比して甚しく高かる可く、斯くて又、英國の商人が佛蘭西の港に穀物の如きものを齎すは佛國に於いて著しき高價の存する場合のみに限らるゝが故である。加之、チュルゴオは自由交易が對外商業よりも寧ろ國內商業を刺戟す可きことを信じた。斯くして彼れが主として念頭に置いたのは國內交易殊に穀物交易に對する制限の廢止であつて、彼れは穀物交易の制限を攻撃するに當つて他の場合に於けるよりも更らに十分に彼れの原理を徹底せしめたのである。(Ibid., p. 303.) 彼れを以つて觀れば、凡そ愚中の愚は、穀物局が有効に穀物の供給を管理し得可しと做すの信念であつた。縱令ひ、官吏は清廉潔白の模範であつたとしても——斯くの如きは過去の出來事に鑑みて最も不當なる假定であつた——、彼れ等は嘗つて經濟生活の複雑性を把握せんと期することを得なかつた、彼れ等は嘗つて需要を算定し、若しくは供給を見積ることを得なかつた。又、彼れ等は嘗つて一定時に於いて價格を決定する多數の働因を估料することを得なかつた。彼れ等の自由に使用し得る基金は常に不充分でなければならぬ。蓋し、有効に穀物を取引するが爲めには、國家の正常なる所得よりも十倍も大なる資本の蓄積を要したが爲めである。チュルゴオは問ふ、「放任せらるゝならば、自動的な可き過程を何故に規制せんと企つるか。食料の價格、國民の富、勞働の價格、人口の増進は總べて皆緊密に連結せられてゐる。是れ等のものは適合の自然的經路に従つて自から均衡を得るのである、而して這般の適合は商業及

び競争が全然自由なるの時に常に設定せられる」と。(Ibid., pp. 305-306.)

チュルゴオの事業が、彼れにして若し之れを完全に遂行することを許されたならば、果して能く舊政體の破産を防止するを得たか如何かは解答困難なる問題である。一千七百七十四年十月十三日、彼れは穀物交易に對する制限を廢止して、穀物をして佛國を通じて自由に流通せしめんことを期した。然しながら、這般の政策は直ちに重商主義者と自由交易論者との間に小冊子戰を展開せしめたるのみならず、此の年の收穫は普通であつたが、價格は速かに騰貴を始め、冬期の末に赴くに連れて民衆の叫喊起り、終には各地に暴動を惹き起すに至つた。吾人は今、デーキン氏の勞作によつて當時の社會情勢と彼れの環境をより、明らならかしめられたる後に於いても猶ほ「チュルゴオは正直にして誠實なる人ではあるが、彼れは世間と人性とを熟知してゐない」と言へるアダム・スミスの評語の妥當なるを思はなければならぬ。

(菊版三六一頁三越洋書部賣價金拾四圓貳拾五錢)